

令和2年度 環境で地方を元気にする
地域循環共生圏づくりプラットフォーム事業

成果報告会 発表資料

活動団体名：（一社）Reborn-Art Festival

活動地域：宮城県石巻市

ワクワクする循環を増やす。

挑戦できるまち、石巻。

地域循環共生圏を実現することで目指す地域の姿

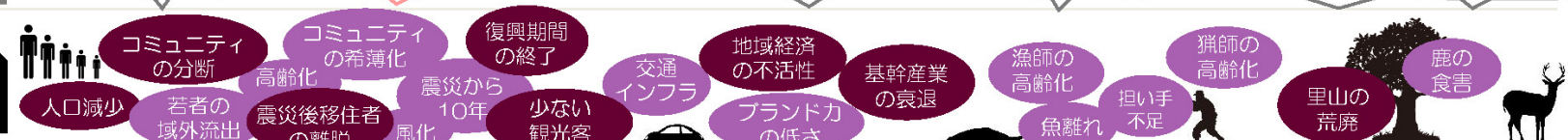
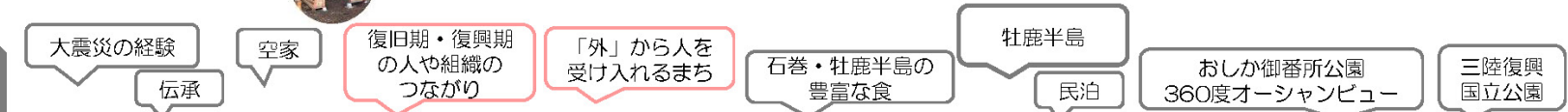
ワクワクする循環を増やす。挑戦できるまち、石巻。

目指す未来

取組

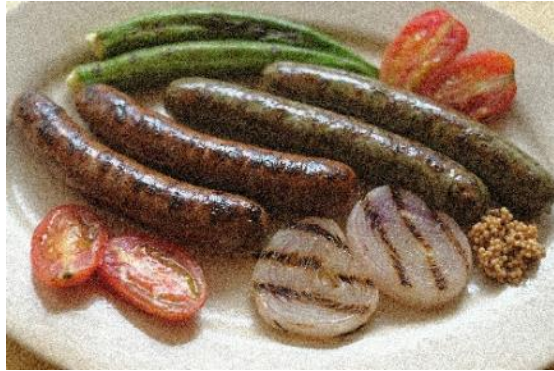
資源

課題



地域のありたい未来の実現のために 今年度取り組んだこと

①鹿肉ジビエシャルキュトリーの開発・販売



木更津のkurkku Fieldsとコラボして、ソーセージ、チョリソー、ハンバーグ、カレーを開発。



■石巻市ふるさと納税返礼品に採用され、69セットを販売！

■地元の人気百貨店のお歳暮ギフトとして、当初目標100セットを上回る136セット販売！

■観光物産販売所兼地域の台所である施設にでも取り扱い開始！

地域のありたい未来の実現のために 今年度取り組んだこと

②常設アート作品などをコンテンツとしたツアー開発

芸術祭本祭会期外でも人が訪れるよう、観光庁誘客多角化等のための魅力的な滞在コンテンツ造成実証事業を活用し、アクティビティや震災伝承、ガストロノミーをコンテンツとしてツアー商品を開発。



FAMトリップの様子

外国人観光客ガイド研修

地域のありたい未来の実現のために 今年度取り組んだこと

③古株・新参者、多様な主体によるディスカッション・共創



「地域経済」「文化」「移住」などをテーマに地域の多様な主体が楽しくディスカッションを行う 「石巻2025会議」



古株と新参者とのマッチング・共創を目指すキックオフイベント
「石巻メジャー×インディーズコ
クリエーション」

小林武史氏も参加し、地域の事業者12名を中心に約30名が参加。
イベント後には早速参加者同士独自のコミュニケーションも！

地域のありたい未来の実現のための「事業のタネ」

1	事業名	アート・ローカルベンチャーの推進によりシビックプライド・地域循環経済の向上を		
	概要	利益追求型経済ではなく持続可能な循環型経済を志向する「ローカルベンチャー」や経済合理性から離れた「アート」の活躍の場や担い手拡大を図ることによって、市民が自分の地域に対する誇り＝シビックプライドを持てるようにするとともに地域循環経済の向上を目指す。あわせて震災ボランティアをきっかけとした移住者や震災後の新しい動きの定着を目指す。		
	課題・ボトルネック	古株と新参者との間の接点の少なさ。震災前の閉塞感に戻り行く雰囲気。	力を借りたい人物・企業像	しがらみ無く古株と新参者の間をファシリテートしうるクリエイティブディレクター

2	事業名	有害駆除の対象だった鹿の食肉加工販売を通じた持続可能な自然環境醸成		
	概要	猟師の担い手不足や環境の変化により増えすぎて食害をもたらしていた鹿を高付加価値のジビエとして食材化し、併せてネイチャープログラムを行うことで、命をいただくということ、持続可能な自然環境を育むことへの理解を深める。		
	課題・ボトルネック	販路の少なさ。特に地域において浸透していない食材としての鹿肉の価値・知名度。	力を借りたい人物・企業像	マーケティングの専門家。エシカル消費の観点からお取扱い扱いいただける企業。

3	事業名	リボンアート・フェスティバルを核とした石巻・牡鹿半島の日常的デスティネーション化		
	概要	RAFによって設けられた常設アート作品や施設、震災伝承プログラム、新しいアクティビティなどをコンテンツとしてツアーや研修・ワーケーションプログラムなどを設け、石巻・牡鹿半島にRAF本祭会期外でも日常的に来訪者が訪れ、地域でお金を消費・循環するようになる。		
	課題・ボトルネック	域内交通インフラの脆弱性。観光、特にインバウンドについてのリテラシー不足。	力を借りたい人物・企業像	MaaSなど先進モビリティの専門家。ワーケーションなど販路開拓の知見のある方。

今年度の環境整備の取組による地域の変化や気づき

話を聞きに行く！

- 間もなく被災10年となるが、そのタイミングだからこと新たなつながりやアクションを待っている方がいることが分かった。
- 地域の金融機関を新たに巻き込むことができた。
- 中間支援組織同士での連携を求めるニーズがあることが分かった。

地域のコンセプトを描く！

- 課題は可能性の裏返しであり、課題の周りにあるステークホルダーなどについて考えることで事業構想をイメージすることができた。
- 地域の金融機関など新たなステークホルダーを巻き込む際にマンダラを提示することでイメージを膨らませていただく役に立った。

事業のストーリーを語る！

- 移住者や震災後のクリエイティブな動き定着や鹿の食害、外国語インフラ・交通インフラの脆弱性など、課題が地域の方には意外と認識されていないことが分かった。
- そうした課題についてマンダラなどを用いて話すことで新たな取り組みの必要性、可能性を前向きに考えていただくことができた。

地域の目標を立てる！

- アウトプットとそれに対応したアウトカム指標を考えることで、事業の打ち手自体についてヒントを見いだせた。
- マンダラを見直しながら考えることで目標の具体化・ブラッシュアップが図れた。
- 指標を数字としてみることで課題への問題意識が具体化した。

2ヶ年の取組におけるボトルネックや新たに見えてきた課題

■ COVID-19

新型コロナウイルスおよびそれに伴う緊急事態宣言の影響で中止になったり事業内容が変更したものが多く、目標シートに掲げた指標についても伸び悩んだ項目が多かった。

■ 震災10年と風化

間もなく3.11から10年が経過し復興期間も終了するが、せっかく見えてきた前向きな変化の可能性が、移住者の転出、従来の地域構造への逆戻りなどで後退しかねない兆候が出ている。

■ 巻き込んだからには成果を！

本事業を通じて、これまでなかなか出会えなかった主体を含めて多くのステークホルダーとつながったが、そうした方たちの期待を裏切らないためにも取り組みを継続し目に見える成果を得られるようにしていきたい。

今後の展望

「ジビエ商品開発」や「ツアー造成」も重要であり、これからも継続・展開していきますが、人のつながり、震災を契機としたこれまでのしがらみにとらわれないオープンなコミュニケーションこそ地域に持続可能な循環をつくっていくための基盤として優先的に取り組むべき内容だと考えます。

2月に実施した、「石巻メジャー×インディーズコクリエーション」はそのような趣旨から大変貴重な機会であり、これをキックオフとして、参加者を増やしながらモデルとなる事業や商品が生み出せるように継続していきたいと考えます。

2月のイベントに参加いただき、継続的に関わる意思を示していただいている日本を代表するクリエイティブディレクター、森本千絵氏、水野学氏にはぜひバックアップをお願いしたく考えています。

